

## 中央銀行、再び

FEDなんか当てにするな、と見切りをつけて長期貸し、短期借り（ショートファンディング）のポジションを積み上げてきた資金担当者や金利のディーラーにとって、FOMCはどうでもいいだろうが、為替のディーラーは依然としてFEDのしもべだ。心模様が天気のように変わってもそれを従順に受け入れ、その度に行動を変えなければならない。

年末にかけて中央銀行の金融政策が再び市場の注目の的になってきた。12月15-16、12月3日、11月19日（12月18日）、それぞれFED、ECB、BOJの金融政策を決める会議がある日だ。他の日の会議があるが、そこでの金融政策の変更の可能性は極めて少ない。

今のところECBが12月に量的緩和政策を拡大する可能性が最も高い。先週の総裁に続き、昨日はECBの主任エコノミストがインフレ率を上昇させるためなら手段を選ばないと言った。ユーロ安を目指して、マイナス金利の拡大も思い切って実行するとの決意表明だろう。

一方、年内の利上げを目指していたFEDが利上げを実行する可能性は低い（30%程度）と言うのが市場の見方だ。今日のFOMC後の声明でその可能性がさらに明確になるとの期待がある。

日銀については量的緩和の拡大の期待は市場にはある。だが総裁の最近の発言から判断すれば、拡大の可能性は少ない。

となれば為替市場ではユーロ安の力が作用する。どの通貨に対してかだが、最も取引量が多いユーロドルが一般的だが、ユーロ円にも相当作用する可能性がある。というのも日銀の量的緩和の拡大期待が一部とはいえ、市場で醸成されてしまったからだ。失望の円買いだ。

いずれにせよ今年もあと2か月ほど。中央銀行の政策を巡って最後の勝負をかけたい市場参加者は少なくないだろう。